古音、方言、白話に託す言語ユートピア  ⚫ 章炳麟 と劉師培の中国語再建論

<table>
<thead>
<tr>
<th>その他のタイトル</th>
<th>寄托在古音、方言与白話上的語言烏托邦  ⚫ 章炳麟 与劉師培的漢語重建論</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>林 義強</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>東洋文化研究所紀要</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>4 号</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>148</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2005年 12月</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15083/00026991">http://doi.org/10.15083/00026991</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
古音、方言、白話に託す言語ニュートピア

章炳麟と劉師培の中国語再建論は、近代中国における言語の現状に対するクリティカルな思考から出発したものである。危機に満ち溢れていた清末においては、たとえ他の分野で自信を失ったとしても、中国語の豊かさ、純粋さと悲観的な見解を持っていた。

章炳麟は、清末の国家や社会のみならず、当時の言語もすでに窮状に陥っている、と見ていた。一八九七年、スペルナーの「進歩...その法則と原因」を「進境之理」と題して翻訳した時、章炳麟はスペルナーの言語進化論を受け入れ、自ら理解したその要旨を「言語文字の変化が複雑になるほど、その教化は文明的である」と表現していった。それに基づいて、言語の発達状態において、言語文字の変化が停滞させようとしてもできない。その逆に、政治が良い時代には文化が荒廃し散漫になるにつけ、言語文字も衰退へ道を下ることになる。
その社会における高度な需要が持続していることがあり、言語が複雑になればなるほど、その文明が繁栄しており、言語とその文明は、ともに繁栄し、そして、ともに衰退する運命にある。そのため、『文字の豊さでその世の盛衰をト」とすることができる、と章炳麟は考えていた。

それを前提に、章炳麟はまず、中国語の変化によって中国文化の変化を測ろうとした。その統計によれば、周宣王時代の史書の『史篇』から『集論』まで、漢字の文字数は九千から二万に増加したが、北宋以降、それは逆に減少し、書文などに至ると、わずか千字で敷衍されていたので、粗末な政治しかできない。そのような語彙の減少現象は、言語表現力の衰退ののみならず、政治と法制の衰退、社会コミュニケーションの抽さを意味したものである、と章炳麟は考えていた。中国言語文字の決定的な衰退が北宋以降に始まったことである、という指摘は、北宋以降、異民族の勢威の下で漢民族の文化が衰退したという彼の民族史についての見方と重なって見れば、その言語論は民族論ときわめて緊密につながっていたことが窺える。

中国言語文字の衰退現象について、章炳麟は英語の繁栄現象を持ち出し、両者の比較によって危機認識を強調しようとした。それによれば、英語は六十万の単語があり、世界で最も豊富な言語である。その言語の豊かさは英語国の強盛の象徴である。その圧倒的な言語の豊かさは、漢字語彙の大幅な増加を緊急課題として中国人に要求しているように見られている。
東洋文化研究所紀要
第百四十八冊

い。そこで、方言と標準語、古音と白話との対立図式は見られず、それらはすべて清末国学の独自の言語論におい
て、国語の創出に資する特有の価値を獲得したものとなった。一方、

北京は唐の時代では少数民族が難居した国境の町にすぎなかったが、宋

タの安禄山がそこに拠点を作ってから、

主言語の言語がタールの影響を受けて大きく変容したので、古典の中国語の発音は南方地域の方言にしか見付け
ることができない。と断論した太平天国が、その「北京話」が正統の「中国音」を歪んだと見なし、それを清朝の

南京の出身者の多い国学論者にとっては、いわゆる「北京話」をそのまま将来の「国語」にするには抵抗感がある

の公定言語という抑圧的権威と言語としての難種性である。
清朝支配層の固有言語である滿州語が非漢民族の言語であるゆえに最初から論外に置かれた。清朝政府自体も乾隆期から、「満漢併用」から「満語単用」へと言語政策を転換し、満州語は形式上、王朝の公式言語の地位を保っていながらも、実質上衰退の道を進めていった。そのため、清朝に反逆姿勢を見せた准末国の言語論は、満州語を論外に置き、むしろ北京話に矛先を向け、その権威を転覆しようとしていた。その対立候補として持ち出されたのは、古音と方言。つまり古典の言語と地方の言語である。そこには、「古典」対「現在」、「地方」対「中央」との対立構図が現れており、その対立構図からは、「古典」対「地方」に基づいて、「現在」対「中央」への反抗姿勢を読み取ることもできる。

異民族との混合が激しい北方地域における中国語は雑種的であり、より純粋な漢民族の言語は南方地域の漢民族の方言にある。彼らは信じていた。そのため、民間や地方が朝廷や中央より多くの古音を保存していることも原因である。図表6には、方言研究によって革命を占うという奇抜な発想がある。彼は独自の「方言地図」ともいうべきものを作り、それに基づいて、中国の方言を発音の相違によって複数のブロックに分けて説明したことがある。その中で、中国北方の方言は一種類しかないのに対して、中国南方の方言は八種類も挙げられている。その方言ブロックの形成において、川の地理的分割と交流が大きな役割を果たしたが、今後は鉄道など交通の発達によって、それらの方言は
統一していくのであろう、と予想されていた。その統一の中心と基準になりうるもののが主に中国南方にあるとの見解が示されていた。

この地域は、同じ文字であるが、その口語を通じることを欲すれば、秦、蜀、楚、漢の声を以って止すべきである。

その後、北方は黄河の災害と金や元の支配を受けて文化が衰退したが、南方は繁栄し続けていた。それに伴い、中国語の正統あるいは中心は中国南方に移ったのである。

文王の化を察して、西南に王、蜀、濮、彭を覆い、江漢が最も美しき。故に、殷に勝った戦争について、史家は称えて曰く「王」、元に始まる。しかし、その末は「変旗」から始まった。《言葉の》音声と音楽というものは、水と土地によるものであり、民は文に従って「更始」する。幽燕の音は、その道が長くないであろう。
南と北を比較すれば、その中流に位置するのは江漢のみである。江陵、武昌の母音と子音は皆正し。

その方言論によれば、中国文化的本来の精粹は、北方での存在が薄くなりつつあり、むしろ南方により多く保存されている。武漢地域の方言は、周朝の標準語である周南と召南の言葉に近く、その母音と子音を繼承しているため、

清末においては、最も正しさ中国語として見るべきである。その解釈によると、漢朝と称し、漢水が天水という川の名から命名されたものである。その漢は武漢であり、夏は武漢近、夏口は漢陽にある。そのため、そこは中国の最も由緒正しい都であろうと認定された。漢水は水路と鉄道から構成された当時の交通の中枢であり、漢民族の居住地という範囲に限って見れば、ほぼ中心に位置している。そのような地理と交通の要素も今後、武漢を中心地としての存在価値を高めるのであろう、と予測されていた。「漢字」という雑誌が創刊した時、章炳麟はその雑誌名に贅意を表し、「漢」の優位性を次のように強調した。

「漢」は地理的中心のみならず、夏の意味を紹介した民族の別称としても正統性を保有している。歴史的、地理的優位性は、武
漢地域をその「方言図」における中央という位置を支えるものとなっている。この独特な見解は、彼の「中華民国
解一により詳しく展開されていた。
とはいえ、章炳麟が提案した言語統一のシナリオは、武漢地域の方言のみで新しい国語を構築し、それによって他の
方言を消滅するというものではなくな、あくまでも武漢地域の方言をベースに、他の地域の方言も取り入れ、各方言
地域が互いに偏見を捨てて、方言の調和と融合を経て、中国語を統一していくものである。そうなり、のつながりを持っており、そのつながりは武漢地域の方言と「古音」
まで通るには同様く欠かせない系口となるものである。
章炳麟の「方言地図」において、満州族の出身地である東北地域での方言ブロックに属さずに、事実上、満州
の外に置かれた。そして、当時の首都である北京の方言は、中国語の中心と基準として、そして、将来の国語として
の正統性が認められている。

今日、膿（すなわち満州族一訳者注）は宛平（すなわち北京一訳者注）に都を建てているが、宛平の言葉は、
全国の基準としてはいえない。

中国語の中心と基準の所在は、清朝の首都ではなく、一地方都市の武漢にあると「認定されている。その言語論
の首都ともいうべき中心はあたかも彼の民族論と国家構想の地理的中心と一致している。最初の「逐満論」の時期
には、すでに黄河の北側を満州族に任じ、南側において、漢民族の安定を保ち、新政治を行おうという発想があった。
その時想定された中心は武漢である。それ以降、章炳麟は一度して武漢を将来の首都にすべきであると提案した。この論点は、その後の彼の言語学の著述において、言語を分類する際の基礎だけではなく、言語研究の手法まで大きな影響を与えていたのである。新話語が南中国の方言を圧倒的に多く採用していることがその明証である。章炳麟が提起した「北京話」、対「南方方言」という言語の対立形式は、彼の排滿論に見られる「支配者の満洲族」に対するみならず、「漢語」すなわち「中国語」の復権に、根拠地のような位置づけとなっていることの大きさがある。南中国はそこから、「漢族」の中華民国の国語を議定する際に、南京あるいは武漢の言葉を国語にするという提案も出されていた。実際に、後年には、

漢字を形を主として、形の中で語音の法が決めており、とえ象形、指事、会意などの文字にもみな正しい音を以って音に従うのではないか。それゆえ、首都（の音）を標準にして（言語統一）を強行する。......（ヨーロッパ）言語の相違からそれを論証した。

古音、方言、自話を託す言語ゆーーピア

首（の音）、言語統一の従うことになったなら、学理に反することは甚だしい。
方言は本来の雅言に違わぬ。
今日の方言は、『説文』、『三倉』、『爾雅』、『方言』に合うものが正に多くある。……

方言は古代の中国語の一部を忠実に継承したものとし、古音に合っている言葉が多くある。その意味では、方言は言語の活きた化石であり、保存されている国粹といえる。章炳麟の方言研究には、各地域の方言が古音とつながりを確認することには欠かせない内容となっている。その狙いは、駁難な方言からその粋を発見し、古音の本来を回復しようとしたことにあると考えられる。その問題意識からいえば、章炳麟の方言研究には、言語の考古学研究でもある。

『新方言』というタイトルに『新』という字を入れたのは、まさにこの意味を込めたものである。一方で、『方言』に比べれば、『新方言』は方言の収集記録に止まることなく、その起源と変化の根拠を求める語源学の著作である。その中で新しく発見された方言は、文化の辺縁地に留まっている怪しくて不便な言葉ではなく、その多くは古音に合っている。このため、方言は話し言葉と別に、儀礼を行うときの古典を読む時は『験験』や『広隷』などの忠語の発音を使っている。それを総合として、さらにかねてなものばって以前、『説文解字』、『爾雅』、『方言』に示された古音、方言、白話に託す語源学的
東洋文化研究所紀要
第六四十八冊

音一を解明できる可能性がある、と考えられていた。そのため、古音を求めることが方言研究の目的として挙げられた。それは、章炳麟の言語学の研究方法を決定的に左右したものである。新方言は方言研究ではあると同時に、古音研究でもある。その論証のプロセスはほとんど、「略出稍説、微之古音」という研究方法、つまり、方言の原理を究明しようとしたものである。それによれば、古音から方言への変容は恣意的なものではなく、ある一定の規則があった。章炳麟はその法則を「六則」としてまとめ、古音から方言への流れ図を示す体系的に、論理的に分析した。その中で、とくに発音の変化に関する二つの法則は、「古音」から方言への変容は恣意的であるのではなく、ある一定の規則に沿って進行したと考えられる。それに沿って進む方言が「第二例」である。そのような法則は「古音」から方言までの変化の道筋を示しているため、それに沿って進む方言が「第二例」である。「第二例」において、方言において「古音」から方言までの変化が可能である。また、方言において「古音」から方言までの変化が可能である。
清朝『小学』の流れを受け継ぎながら、新たな天地を開き、『爾雅』『方言』『秋隄』以来の方言研究の空白を埋め
tと自負していた。

その研究に基づいて、章炳麟は、方言研究を『方言一致』の解決方法として提起した。清末当時行われた『方言一致』の大方の議論について、章炳麟は批判的見方を持っていて、定められた文法は、演義小説に近い。一部は純粋な白話であって、その中に蘊蓄着実の言葉を混ざっている。使われている熟語は、ただ唐宋の文人が造ったものにすぎない。それならば、直接方言を利用したほうが『方言一致』を達成やすいのであろう。

何しろいったん方言に戻れば、言文不一致の現象がまったく見られなくなる。しかも、古音に深く契合しており、唐宋の儒学者の言葉に対しては経典ともいえる……方言が文にあわないということではなく、ただ士大夫たちが自ら識字できたのは『文』に合っており、しかも古音古義を踏まえて表しているため、当時の人々に『文』として見なされていた唐宋以降に現れた言葉に比べてより古典的な『文』ともいえる。『方言一致』論ではっきりと優劣を付ける表現である。方言の言葉として『文』よりも見なされてきた唐宋以降において成り立っているとの見解によって、方言研究を『方言一致』の解決の道として強調していた。

古音、方言、白話に託す言語研究
新方言が書かれた経緯について、章炳麟は自序において、文献の哀微、諸夏民族の不安と不統一を悲しみ、方言研究を通じて古典の伝承と言語の統一を推進しようとする志を披瀝した。その志に共鳴した劉師培は同書の後序において、次のように述べた。

将来、民言を統一し、群衆を導くには、ここから取ることがあるのであろう。東晋以降、胡、羯、氐、羌が中国に侵入し、淮河の南北、夷音が両親に混じった。さらに、モンゴル、満州族の乱を加え、風俗が退廃し、虜語が広がった。しかし、曲がる街の話し（つまり、下町の会話——訳者注）、婦人幼児の言葉は、かえって故言を失わず、保つことができた。これは夏声のわずかな存続である。昔、歐州のギリシア、イタリアと同じく、夷言を革めて夏声に従うと欲すれば、また必ずこの本を嘆せ。

この後序は清末国学に共通した方言と古音についての見解として読むことができる。方言は「夷言」、「夷音」、「虜語」の混乱に取り残された「故言」、「夏声」、「旧語」である。現在の共通語より一段上の地位にある。ギリシアやイタリア諸国の事例に証明されたように、それを保存することができれば、現在の共通語より一段上の地位にある。したがって、

清末国学において、方言研究と古音研究は、二つの異なる分野ではなく、その一致した射程によって同一の分野とし
「光復」の原動力を呼めるということも期待されていた。そのため、方言と古音の研究は、「光復」の事業を拓く先導的かつ基盤作り的な仕事である。と位置づけられていた。

古音は一般的に、六朝以前の中国語の発音を指すものであるが、章炳麟と劉師培の場合は、それをさらに中国語音声の歴史の第一期である紀元前三世紀までの周秦漢初までに限定していた。章炳麟は、民間時期になった中国語音の変化の歴史を各時期の言語学著作によって五つの時期を分けることを明らかにした。章炳麟の『文始』は『新方言』、『国故論衡』などはその古音研究に偏重していた言語学に変化をもたらし、大きな研究を上げていた。章炳麟の『文始』は『説文解字』に取挙された言語字の約三分の二に当たる『五百七十字』、『五十六名』を考察し直し、その文形、義の起源・変化を詳しく分析した。そこで、従来の「旨要曲形残」、「同音重複」的手法で作られた文字などは『初文』と呼ばれ、その上で、「省変」、「合体象形」、「合体指事」、"声言曲形残"、「言物」とする言語学の
基本要素と規定されたため、「説文解字」などに比べて、基礎となる漢字の数が増えたこととなった。漢字の原型と名あわせの言葉についての考察は、それ以降の「変易」（音義相離）と「草隷」（義音同符）がより詳しく分析されている。出自不明の一部の文字の起源は、それによって、説明できるようになったというスペンサーの言語論から影響を受け、言語の起源を求める際に従来のような文字の意味と形状を重要視する研究方法ではなく、音声の研究から始める分析法があり、出現しない文字の起源は、それによって、説明できるようになったというスペンサーの言語論から影響を受け、言語の起源を求める際に従来のような文字の意味と形状を重要視する研究方法ではなく、音声の研究から始める分析法があり、出現しない文字の起源は、それによって、説明できるようになったというスペンサーの言語論から影響を受け、言語の起源を求める際に従来のような文字の意味と形状を重要視する研究方法ではなく、音声の研究から始める分析法があり、出現しない文字の起源は、それによって、説明できるようになったというスペンサーの言語論から影響を受け、言語の起源を求める際に従来のような文字の意味と形状を重要視する研究方法ではなく、音声の研究から始まる分析法がある。
章炳麟の言語学研究、とくに音声学研究において、一つ重大な意味を持つ時代区分がある。彼は、純粋な中国語のルーツを先秦漢初に求めていたが、その後の変化については、宋までしか認められておらず、元以降に現れた発音の変化をすべて「誤音」と見なかった。その判断は、古典重視の伝統があるとはいえ、元朝の支配者がモンゴル族であり、元朝からいわゆる不純な言語が形成したことから、宋以降の言語変化に違和感を感じたことがその背景にある、元朝から追放しようとしていた。彼が容認できるのはせいせい唐宋の「今音」までであり、それ以降に派生した言葉の発音を中国語から追放しようとしていた。それは言語においての「民族浄化」ともいえる。それ故に、言語の純粋な本源を徹底的に追求する「言語の潔癖症」ともいうべき姿勢は、彼の復興論を中心とした「専一的駆逐主義」ともいえる。そこから、章炳麟の小説を実践する努力と能力を示そうとするばかりではなく、自らの文章を古典漢語の生き抜く模範として仕上げよう、という願望も秘められていた。それゆえ、「章炳麟の言語学は極めて難解であるとしばしば批判され、敬遠されたものとなってしまったのである。清末国学における方言研究は、地方史研究と相乗効果を発揮した。その地方史研究は、方言研究と一致した問題意識によって展開されたといえる。黄帝は「方言の編纂を提唱し、実行していた。その目的は、中央「君権」に遠く、異民族と専制政治に汚染され、地域の方言より純粋で、より多くの価値を保有しているものとして、再発見された。清末国学において地方史研
2 白話

白話がレベルの低い下品なものとの見方に異議を申し立てる。そうして研究し提唱したのは、五四時期が最もはなかった。清末からのことである。「古雅」な文語を追求した清末国学の論者たちもその白話文提唱に参加した。一見して矛盾したものの現象は、清末国学の自説、在研究について検討すれば、その真意が見える。この節は、その中心的な論点のみを取り上げ、五四時期の自説論と史的見ることを念頭において論
東洋文化研究所紀要
第百四十八冊

を進めることがある。

清末の白話論者の方々は、進化論を言語学に適用し、言語の進化という方向において白話を評価し、その将来性を語っていた。進化論を批判した章炳麟を除き、多くの国学論者もそのような言語進化論を採用していた。しかし、一方では、「古学復興」を唱え、古音を回復しようとしたが、他方では、白話を進化的な段階に置くことをならば矛盾が生じるわけである。それらは五四時期にも見られる論点である。しかし、一方では、「古学復興」を唱え、古音を回復しようとしたが、他方では、白話の進化の上位段階に置くことをならば矛盾が生じるわけである。それらは五四時期にも見られる論点である。しかし、一方では、「古学復興」を唱え、古音を回復しようとしようとしたが、他方では、白話の進化の上位段階に置くことをならば矛盾が生じるわけである。それらは五四時期にも見られる論点である。しかし、一方では、「古学復興」を唱え、古音を回復しようとしようとしたが、他方では、白話の進化の上位段階に置くことをならば矛盾が生じるわけである。それらは五四時期にも見られる論点である。しかし、一方では、「古学復興」を唱え、古音を回復しようとしようとしたが、他方では、白話の進化の上位段階に置くことをならば矛盾が生じるわけである。それらは五四時期にも見られる論点である。しか
さらに「提倡平民政教」を加えた。白話提唱はその「提倡平民政教」の実践の一と位置づけられた。その中では、「提倡平民政教」は国学を抜擢するどころか、国学の存続と拡張にとって力強き助人と考えられていた。そのため、章炳麟は文言を用いて著述すると同時に、その一部を論点をさらには白話によって解説し、「教育今語雑誌」において、生涯で最もわかりやすい論文を多く残した。

章炳麟と劉師培の白話論は常に、白話文学の伝統、そして、その伝統の上で育成してきた地域差異を超えた標準語的な性格を重要視していた。章炳麟が白話を認め、積極的に取り組んだ理由の一つは、白話が新規に作った言語の歴史性を備えていたからと考えられる。彼は、白話のルーツを上古から追究しようとした。それによれば、「尚書」の詔詛をはじめとした上古時代の文献の多くは当時の白話で書かれたものであり、「爾雅」自体も周初期の白話を解釈する言書である。それらの言語は、白話提唱の正当性を支えることとして強調されている。

古音方言の白話とそのような白話の歴史についての追究が生まれてきたものである。彼は白話を言文の分離と統一、方言、言語、言語に託す言語学ピアに、素朴な「質言」を推奨した。魏晩名手はその「質言」という基準に満たしたのならず、当時の白話に近いものである。その魏晩の言語、文言および精神を学ぶことも「復興古学」の一環として強調されていた。
一の歴史において考察した。それによれば、遠い古代では、学術の伝授は書籍よりも口耳を通じて行っていたことが多かった。

宋朝以降の中国語は、書き言葉を話し言葉が近づく、両者の間に隔たりが薄くなっていった。儒学者などの「語録」から浅に至ることである。故に、文字進化的公理でいえば、中国は近代以降、必ず白話繁盛の一層階を経る。これにより、言語が「文」から「質」へ、「深」から「浅」への変化進過程は、言語の退化ではなく、むしろ進化的現象であり、白話はその過程における将来性は、スペンサーの進化論によって保障されている、と劉師培は言っていた。そのため、劉師培は言語の進化において重要な歴史を経て、「旧意」と「本意」の多くを失い、さらにその文字の繁雑さと多義性が多くの人に問題視されており、もう改革しなければならない時期が訪れている。その対策として、新しい表音方法を採用すること、そして、言語の統一化、国語統一などである。劉師培は、それらの論点と提案を『中国文字流弊論』、『論文雑記』、『音韻反切近於字母』、および『壊書』の『正名篇』などにおいて繊り返して展開していた。

— 164 —
清末国学論者の中で、劉師培は「言文一致」について最も強い問題関心を示していた。劉師培は、中国が一六世紀以前のヨーロッパと同様に某たや言文不一致の状態に陥っていたことと明かされ、その言文不一致の原因は文と言の分離、言語と文字の分離、言語と文字の不一致、言語と文字の矛盾である。

自少はその対策として、言文一致のための言語・文字の統一が重要であると主張した。劉師培は、言文一致の必要性を強調し、言語と文字の統一は、言語の文化的・社会的・政治的役割を果たす必要があるとした。言語と文字の統一は、言語の文化と言語の伝達を可能とするものであると主張した。

言文一致のためには、言語と文字の統一が必要であるとした。言語と文字の統一が可能であるとして、言語と文字の分離、言語と文字の不一致、言語と文字の矛盾を解決することは重要であるとした。劉師培は、言語と文字の統一は、言語の文化と言語の伝達を可能とするものであるとした。言語と文字の統一が可能であるとした。
これは章炳麟が『洪秀全演義』のために書いた序文である。『洪秀全演義』は白話演義の形で書かれており、洪秀全の思想を反映している。

清末における白話新聞の出現は、まずそのような実用的な目的において評価された。一九〇〇年代に入り、中国各地に次々と白話新聞が現れてきた。その代表的なものとして、一八九八年無錫に創刊した『無錫白話報』や、一九〇四年北京に創刊した『京話報』が挙げられる。彼らも特定地域の出身者が編集し、地域の白話をベースにした新聞であるが、方言を母語として表現したものであり、共通化した白話文学の伝統を受けて続いたものである。白話は各地の異同があるものの、統一した漢字で表現したもので、『京話報』は地域の異同があるものの、統一的な漢字で表現したものである。

そのため、清末国学の参加者でもある林獬は、一九〇〇年代に上海で白話新聞の創刊を企画した。その機会が現在の言語統一においても活用できると期待されていた。そのため、林獬は白話新聞の出現を中国におけ「言文合一の関」として歓迎した。白話は方言に近い文言よりも共通性が強く、しかも変化がゆえ、教育を通じての民智の引き出しに社会全体の文化水準を高める役割を果たすわけではない。
ムの高揚につながることができ、と信じられていた。

図師提は言語統一ままでの一段階として、自話統一を提唱した。それは、まず『官音』と『官話』によって各県の異同を処理して各省ごとに自話を統一し、そこから各省の異同を処理してから全国の自話を統一することという渐進的
的なシナリオである。

今は即に自話新聞を教科書とし、省会の人を教師とし、材を求めることができるが、他族を求めることが少ない。それによって一省の言語を統一し、その後さらに進んで各省会の微小な差異を除去し、次第に全国の自話の統一を図る、という漸進的
の統一を果たす。

劉師提が提示したそのプロセスにおいて、自話新聞は教科書的な存在である。それを通じて、まず自話における地域の差異を段階的に解消すべきである。そこににおける自話は、次第に『白話』の通じて統一した自話は今度、文言、方言、古音、さらに訳語とも合流し、より上の次元での言語統一に
向かわせるのである。章炳麟や劉師提の自話論の重視は常に、自話文学の伝統から育ってきた各地の自話の均質性と
白話による『言文一致』の達成の可能性についての研究と論述に傾いていた。その『言語の均質性』は方言の短所、
そして『言文一致の可能性』は自話の短所を補えるものとなり、古音と方言にとって、白話は対立関係ではな
く、補完関係にあるものとなる。彼らの白話提唱は、白話によって通俗の文が修めてこなかった現状を修正し、

－167－
「教育改革」としての役割を果たすことを評価しながら、文言などが他の言語構成との共存という前提は常に付けていられる。そこで、白話は古典漢文に取って代わることを目指すものではなく、他言語構成と同じく、新たな統一した言語を創出するに必要な材料の一つにすぎない。白話のみを推し進めるのではなく、あくまでも他の言語構成との共存、融合、そして、再生産によって「言文一致」の新たな言語を誕生させるということは目指すべきである。白話の統一は「言文一致」に貢献できるが、言語統一そのものはではなく、「言文一致自体も言語統一までの過程にすぎない。それは五四時期の白話論と五四時期の白話論がその言語の位置づけを決定的に違っているが、それによって形成される、自話そのもののしか提唱されていないものを指摘した。たとえば、五四時期の白話論は、白話が自言語再建の目的地としたのに対して、清末国学のようには、白話が提唱されるながらも、古語の真に上位の存在として位置していた。そのため、清末国学においては、白話が提唱されながらも、それから古言、方言などと合流して、さらに大きな長い道のりがあった。五四時期の白話論は、白話を中国語再建の目的地としたのに対して、清末国学の白話論は、白話が提唱されながらも、
揚つながるが、古典中国語の存続も人々の愛国心を育む。「国学保存」のために基盤を維持することができ、白話はあくまでも、それが相乗効果にとって、中国語再建に貢献できる点において、言語を同化化と均質化することによって、白話は一つのことが期待されている。「教育今語」として、言語の異同をなくして全国の言語を同化化と均質化することによって、白話は、地域の異同をなくすために、言語の歴史が白話のそのような役割をもたらすことに、書き言葉によって保存された国語をより平易な話し言葉を通じて高揚するという語句に重心が置かれていたのである。大衆向けの排滿宣伝のために白話を利用したのと同じように、そのでの白話は道具なり、言文一致のゴールではない。言語統一の目的としながらも、北京話、各地方方言、外国語、古語、方言、古語などをともに研究を尽くし、中国の言語文字の起源と変化を完全に明らかにした上で、由緒正しくて純粋な中国語を「正しく」作り出すということである。その考え方は、後年の五四時期の白話運動に対して、たとえ急進的な白話論者に影響を与えていたが、しかし、彼は白話それ自体に反対したわけではある。自らの言語論を堅く守り抜いた章炳麟は、五四時期の白話論に異論を唱えていたが、それは、当時の白話運動に見本を提示しようとする意味を込めていたことと考えられる。
五四時期の新文化運動は、白話を「自給自足」できる状態に達した言語であるため、それが「言文一致」と言語統一の目標であった。それに対して、清末国学の言語論は、白話のみではないことが必要であり、それらをあくまでも「言文一致」と言語統一の過程と位置づけていた。そのため、清末国学における言語論の前提とされ、それらは結果として清末においては実現できなかったものとなった。

この八文字は、清末国学における言語論の前提とされ、それらをあくまでも「言文一致」と言語統一の過程と位置づけていた。そのため、清末国学における言語論の前提とされ、それらは結果として清末においては実現できなかったものとなった。

上述の議論点について、钱玄同による一言文一致と言語統一の過程と位置づけていた。そのため、清末国学の言語論は、白話のみでは不十分であり、それをあくまでも「言文一致」と言語統一の過程と位置づけていた。それらは結果として清末においては実現できなかったものとなった。

一八九七年、章炳麟はスペンサーの『Essays, Scientific, Political, and Speculative』に「近代中国人の一つの言語ユーティピア」を描き出したものとして見ることができる。その反対した方向を指示したのはほかならぬ、その中国語再建論者たちはリードしていた清末の国学論である。
同上第四頁。こしたのは、原文の「語」については、中国語の場合、「字」と訳し、英語の場合には「単語」と訳す。また、「二つの言語を言及するなどの場合は「語彙」と言えとなっている。ただし、そもそも、中国語の字と英語の単語を言語構成要素として同じレベルにおいて比較することが適切かどうかには疑問の余地が残る。


平野健一郎「アジアに

同音・方言・白話に託す言語」本

点音、方言、白話に託す言語
査研究とはえない」とまで言い切り、その背景の下、章の業績について、「方言・語源について全面的な研究」としては最初で
あり、とくに「国故論衡」上巻の「正論」、下巻の「異書」第二章の「方言」及び「新方言」第一巻の「音表」は前人未到であ
る」と評価した。朱星「中国語言学史」第六〇頁、「異書」第二章の「方言」及び「新方言」第一巻の「音表」は前人未到であ
る」と評価した。朱星「中国語言学史」第六〇頁、「異書」第二章の「方言」及び「新方言」第一巻の「音表」は前人未到であ
る」と評価した。朱星「中国語言学史」第六〇頁、「異書」第二章の「方言」及び「新方言」第一巻の「音表」は前人未到であ
る」と評価した。朱星「中国語言学史」第六〇頁、「異書」第二章の「方言」及び「新方言」第一巻の「音表」は前人未到であ
る」と評価した。朱星「中国語言学史」第六〇頁、「異書」第二章の「方言」及び「新方言」第一巻の「音表」は前人未到であ
る」と評価した。朱星「中国語言学史」第六〇頁、「異書」第二章の「方言」及び「新方言」第一巻の「音表」は前人未到であ
る」と評価した。朱星「中国語言学史」第六〇頁、「異書」第二章の「方言」及び「新方言」第一巻の「音表」は前人未到であ
る」と評価した。朱星「中国語言学史」第六〇頁、「異書」第二章の「方言」及び「新方言」第一巻の「音表」は前人未到であ
る」と評価した。朱星「中国語言学史」第六〇頁、「異書」第二章の「方言」及び「新方言」第一巻の「音表」は前人未到であ
る」と評価した。朱星「中国語言学史」第六〇頁、「異書」第二章の「方言」及び「新方言」第一巻の「音表」は前人未到であ
る」と評価した。朱星「中国語言学史」第六〇頁、「異書」第二章の「方言」及び「新方言」第一巻の「音表」は前人未到であ
る」と評価した。朱星「中国語言学史」第六〇頁、「異書」第二章の「方言」及び「新方言」第一巻の「音表」は前人未到であ
る」と評価した。朱星「中国語言学史」第六〇頁、「異書」第二章の「方言」及び「新方言」第一巻の「音表」は前人未到であ
る」と評価した。朱星「中国語言学史」第六〇頁、「異書」第二章の「方言」及び「新方言」第一巻の「音表」は前人未到であ
る」と評価した。朱星「中国語言学史」第六〇頁、「異書」第二章の「方言」及び「新方言」第一巻の「音表」は前人未到であ
る」と評価した。朱星「中国語言学史」第六〇頁、「異書」第二章の「方言」及び「新方言」第一巻の「音表」は前人未到であ
る」と評価した。朱星「中国語言学史」第六〇頁、「異書」第二章の「方言」及び「新方言」第一巻の「音表」は前人未到であ
る」と評価した。朱星「中国語言学史」第六〇頁、「異書」第二章の「方言」及び「新方言」第一巻の「音表」は前人未到であ
る」と評価した。朱星「中国語言学史」第六〇頁、「異書」第二章の「方言」及び「新方言」第一巻の「音表」は前人未到であ
る」と評価した。朱星「中国語言学史」第六〇頁、「異書」第二章の「方言」及
【類語】「類語」は劉師培の功績もある。劉師培の考察、論証が三ノケ所あまりが採用されてからである。

【国音研究】「国音研究」は劉師培が自序で明らかにしたように、「方音」

【方音】「方音」は刘師培の方音序、方音編、方音論などの方音に関する内容を含む。

【自序】「自序」は劉師培の自序で、この文章の出発点である。
東洋文化研究所紀要
第百四十八冊

27
劉師培論輯偏向士志序例
《國粹學報》一九○六年第九期

28
章炳麟論纂三州志言
《國粹學報》一九○六年第一期

30
《章炳麟緒論》、《追恩》第五號

32
錢玄同《教育今語雜誌》之緣起

31
章炳麟與魏晉文學

フラグメントのため、一部の文は読ませられなかった。
東洋文化研究所紀要
第百四十号

前掲劉師培『論白話報與中國前途之關係』から『有所謂報』と『少年報』に五四回に分けて連載したものである。一九〇六年香港の中国日報社は四四回本の完全版を出版した際に、この序文を載せた。

『中国自話報』の編集長林獬は、自らのこの志を表すために、号を自話道人と称した。それ以降、多くの自話道人、たとえば、江戸の『大公報』、香港の『中国日報』、天津の『大公報』、香港の『中國日報』は、地域名を新聞名に使わないようになっただけで、それにしても、『杭州白話報』の一九四年、第二章『清末の自話提唱と白話報』がある。ただしその中で、『杭州白話報』の創刊年について、第五頁は一九一〇年としたが、第五頁は一九一〇年としており、矛盾している。

前掲劉師培『論白話報與中國前途之關係』、前掲『國粹與西化』、劉師培文選』、第一二頁。

前掲玄文集』、第一五巻共通、第一〇頁。

前掲『文言』、第二巻、第三巻一三二七頁、中國人民大学出版社一九九年。ただし、それらの言語構成は平等的ではないとも強調された。

楊玄文、辻賢道『章太炎的自話文』の中の一部の文章は実際、楊玄文が書いたものであるという見方もある。陳敬瑜『序』、前掲『章太炎文集』、第一五一五頁参照。